

netナビ新聞

中学受験情報

2019年6月25日発行

48号

入試情報

初めての中学受験

『わが子に最適な学校選び』をどう進めるか

中学受験を決意するという事は、保護者が「わが子の中等教育環境を自らの意志で選択する」ということにほかなりません。中高一貫校を選択する場合は、3年後の高校受験を意識することなく、中等教育の6年間をトータルなものとして捉えるということでもあります。今号では、お子さんの中学受験を初めて迎えようとしている保護者の皆様と一緒に“わが子にとっての最適な学校選び”を考えます。お子さんがどのような中高時代を過ごすことが、その後の高等教育すなわち大学・大学院に進むに際して、また社会に出ていく時に、大きな力を発揮していけるかを意識して考えてまいります。



学校選びは親の大事な権利である



「学校選び」ということをどのように思っていますか。弊紙では、「子どもの教育環境の選択は親の大事な権利」であると考えます。中学受験に即して言えば、お子さんの教育環境を考えて、その理想形を実現するために、義務教育である中等教育前半課程の中学校3年間と非義務教育である残りの高等学校3年間の合計6年間を、親の責任で選択していくという行為なのです。

いきなり、七面倒くさい言い方をしました。ただ、ここが大事なところですので、少しお付き合いください。学校選びに際して、子どもの教育環境の理想形を追求するための根本の姿勢とはどういふものかを、今一度確認してほしいのです。

中学受験のための学校選びは、お子さんのためにあるもの、お子さん本位で考えるものでなくてはなりません。そんなこと分かってきているじゃないかと聞かれそうですが、親の大事な権利の行使であるお子さんのための学校選びが、親の期待が独り歩きした状態となっていないでしょうか。親の子どもへの期待の大きさは、子どもを愛するがゆえであることは重々承知していても、お子さんにとって親のあまりに大きな期待は、時には重荷となってしまふこともあるのです。

今号では、初めてお子さんの中学受験を迎えようとしている保護者を想定していますが、上のお子さん(兄姉)が親の期待に応え、充実した中学受験を経験したという場合もあるでしょう。その時と同じようにやっていると、下の子(弟妹)にとってど

point 7 どのような学校形態を選択するのか。

あえて形態の話をもっと持ってきました。お子さんが進もうとしているのは国立や公立の中高一貫校も対象としているかもしれません。

しかし、圧倒的な比率で進むのは私立の中高一貫校です。私立は公立学校とは異なり、男子校、女子校さらには共学校に分けられます。大学付属校であっても、系列の大学への進学を目指す大学付属校もあれば、一定の割合で外部の大学に進学する付属校もあります。私立はすべての学校が建学の精神に則って、人間力、学力の育成に邁進していますが、公立学校と異なるのは宗教的バックボーンのある学校の存在です。

殺伐とした現代社会、競争の激しい国際社会の中で生き抜くためにこそ宗教の意味があると考えられる方もいるでしょう。そのあたりはそれぞれのご家庭の価値観によると思いますが、欧米の価値観を理解するという意味では、宗教とりわけキリスト教を理解しておく、接しておくということは意味があるのではないのでしょうか。



以上はいくまで指標であり、考え方の一つの例です。学校説明会や公開されている学校行事などに参加することで「わが家としての項目」をチェックしていけば、お子さんの様々なものを伸ばしてくれる学校は必ず見つかるでしょう。

point 5 クラブ活動、委員会活動が活発で、交流の場が充実しているか。

多くの一貫校卒業生は、「中高一貫校での仲間・友人こそ「一生の財産である」と言いまふ。中高一貫校では同学年交流だけでなく、自分の学年を中心に上下で5学年との交流が可能。同学年というヨコのつながりに加えて、異学年というタテのつながりがお子さんを豊かな人間に育ててくれるでしょう。同世代に自分にはない発想をしていく仲間がいることを知るだけでも十分な刺激となるでしょう。そこで認められれば自己肯定感が増すでしょうし、批判されればいい意味で謙虚になれるというものです。本音で話せる仲間、自分をさらけ出せる友人をどれだけ持っているかということが、在学中だけでなく、大学として社会に出た時に生きてくるのです。

クラス・学年で仲間・友人を作るだけではなく、もつと枠を広げて異学年との交流をするためには、クラブ活動や委員会活動に参加することが大事になってきます。クラブや委員会などが活発、充実していれば、

point 4 体験活動を重視しているか。意識的に失敗の場を設けているか。

中等教育期では、知識の獲得と同時に体験活動に取り組むことが大事になってきます。体験活動を通して、日本国内においてもいろんな人々がいることを知り、世界観を広げることが出来ます。自分の思い通りにはいかないことが、世の中にはいかに多いかということを知ることでもできるはず。その時、どこに問題があるかということを見つけていくこと、あるいは何かを問題としてそれを論理的に詰めていき、自分なりの解決策を提示することを、最初は稚拙であっても習慣化していけば、必ず社会人になっても役に立つはず。何でもすべてうまくいく必要はないのです。むしろ失敗を経験することが大事なのです。

そのためには、学校が生徒に意識的に失敗の場を設けているかにも注目する必要があります。この時、自分一人で対処するのではなく、仲間と一緒にって対処していくことを求められれば、自分の意見をしっかりと述べなくてはならないでしょうし、仲間の意見を聞かなくてはなりません。協力して課題に当たることで、プレゼンテーション、コミュニケーション、コラボレーションする力が知らず知らずのうちに鍛えられ、能力が磨かれるのです。

失敗をたくさん経験していれば、他者の失敗に対しても寛容になることができるでしょう。これからの社会は正解がこれだと分かるものは大変少なく、これまでの経験が通用しないことのほうが多いと言われる

ば、学年を超えた新たな交流が生まれます。中高という枠の中ではありますが多様な人物との交流が続けば、人間としての幅を大きくしてくれるでしょう。中高でのこのような交流が、大学や社会での、あるいはグローバルな社会での人間関係の構築に大いに役立つのです。

point 6 次代を生き抜くためのよりよい教育環境の提供を目指しているか。

学校が現状に満足せず、生徒のためによりよい教育環境を提供しようとするかどうかに注目してほしいと思います。すべての学校は預かった生徒の向上を目指しています。改革を続けていますと宣言しているかどうかではなく、つねに微修正しながらやっつけていこうとしている姿勢が大事です。

誰もがこれからの社会がどのようなものになるか想像が付きません。どのような将来になろうとも対応していくためには、生徒が自ら思考し、判断していけるような環境を整備していくことが重要なのです。そのためには、つねに試行錯誤していかねばならないのです。「今までやってきたのだから、これくらいいいだろう」という姿勢で指導を行うような学校で学んでは、人工知能(AI)の急激な発達に、あっという間に飲み込まれてしまふでしょう。

学校は、不断の努力を重ね、よりよい教育環境の提供を目指さなければならぬはず。そういう学校であるかどうか注目するのは当然のことなのです。

point 8 中学受験はお子さんの成長を待たずしてはくれない



中学受験は大学受験とは異なり、お子さんの成長から見ますと、決して公平な競争

ではありません。それは中学受験が、お子さんの成長度がバラバラな時期に行われるからです。11〜12歳のこの時期、お子さんの成長度は大きく異なります。

たとえば、算数などで、割合や大小関係に対する理解に大きな差があることがあります。物語文や随筆を易々と読みこなすお子さんがいる一方で、登場人物の気持ちの読解一つとってもまったく理解できないというお子さんがいます。では、このお子さんは能力が不足しているのでしょうか。違います。気持ちを理解するための経験の量が不足しているのです。

4月生まれと3月生まれでは、人生の長さに一年近くの差があります。11〜12歳の段階での一年は決して小さくない期間です。こういう差は、お子さんが成長すれば必ずと解決することですが、入試がその時期に行われるということでデリケートな問題が発生するのです。小学校高学年段階での成長度には、兄弟姉妹でも違いがあるのですから、兄弟が理解できて「その子ども」が理解できるとはかぎりません。

自分の子どもならば同じという判断や決断は急いですべきではないでしょう。まして、ほかのお子さんが見て、それを自分のお子さんができないのを見て、それを自分のお子さんの努力不足と断じないでください。

中学受験の小学校高学年では「その子ども」の成長度・性格を十分に意識して、さらにはその時点での成績(お子さんの学力、能力ではないということも理解してください)を考慮した上での子どもの対応が求められるのです。

たとえば、晩成型のお子さんにもいろいろあるでしょう。同じように見えるのんびり

り屋さんもよく見れば違うのです。言い方も千差万別なのです。わが子に一番適した言い方を見つけてあげるのが親の責務です。親のものの言い方に子どもは敏感です。

兄弟が親の期待にしっかりと応えている場合は、それと比較する言葉などにひどく傷つくことがあります。時には劣等感を抱く原因にもなってしまう。この時一番大事なのは、「あなたのことは最後まで守る」ということをお子さんに感じさせる適した言葉遣いとともに、子どもを心の底から愛しているというシグナルを与え続けることではないでしょうか。

「人間力を磨く場を見つける機会」



ただ、お子さんの成長度、性格などを十分に考慮して準備を進めていても、中学受験はお子さんの成長を待つてくれませんか、どこかで割り切りも必要になってきます。首都圏や近畿圏の中学受験は、1月〜2月に行われます(推薦入試は除く)。その時期までの成長度で受けるしかないのです。

筆者のこれまでの中学受験生を見てきた経験を通して添えるならば、中学受験段階では大変幼く、成績面でも真ん中よりかなりに位置してお子さんで(中学受験では成功者の部類には入ることができなかったと本人も自覚していました)6年後に名立たる大学に合格し、社会で活躍している人物は何人もいます。自分にびつたりの学校に進学した場合の中高6年間の学力・人間力の伸びは、大人の想像を遥かに超えるものなのです。

わが子の学力・人間力を伸ばしてくれる学校とは



学校選びとは、突き詰めれば「わが子の学力・人間力を伸ばしてくれる学校」を選ぶということ。そのためには、全国の私立・国立そして公立の一貫校が、学力育成、人間力育成にどのようなこだわりをもっているかということを確認してほしいと思います。それと自分たちの価値観と擦り合わせながら、どの学校が適しているかを考えていただきたいのです。ただ、それではあまりにも漠然としていますので、弊紙がこれまでの学校取材、入試取材などを通して把握した、お子さんを伸ばす学校かどうかの指標・尺度めいたものとして考えてほしい事柄を、以下に提示(ポイント1〜7)します。こういう見方が絶対だというつもりはありません。ここに提示する見方を参考に、自分なりの「学校の見方」を磨いていただければ幸いです。



point 1 考えること、学ぶことの意味を理解させ、その仕方を学ばせようとしているか。

これまでの時代は「知識の正確なアウトプット」ができればいいとされてきました。それはこれまでの時代には成功モデルというものがあつたからです。ところが、これからの子どもたちが生き抜いていかななくてはならない時代は、正解が簡単には見つからない時代であり、正解そのものがない、とらえず最善解の提出が求められるという時代となつてきています。

このような時代を生きていかななくてはならない子どもたちに必要なことは、そのつど柔軟に対応していく力です。つまり、つねに自分の頭で考えなくてはならないのです。知識を活用しての問題発見能力・解決能力が何より求められるのです。

そこで、そのための思考力・判断力・コミュニケーション力が必要となつてきます。獲得した知識を鵜呑みにするのではなく、それを批判的にすらすら捉え、活用する姿勢が求められるようになりまし。つまり、自分の頭で考える姿勢を習慣化することがますます大事になってきたのです。

そのためには、考えること、学ぶということがどういふことか、その仕方を6年間でしっかりと「学べる」環境が整っていることが求められます。

教員が一方的に教えるのではなく、生徒の学びを刺激し、考えを引き出す存在、いわゆるファシリテーターとしての役割を果たしているか、そのあたりに注目してほしいと思います。教員がファシリテーターとなるこ

中学受験はゴールではありません。中等教育という環境の選択の場であり、新たなスタートの場なのです。保護者には、お子さんの成績は尊重しても、それが学力や能力と即つながるものではないことを理解してもらいたいと思います。お子さんの中学入学後6年間の学力、それを支えする「人間力を磨く場を見つける機会」であることを忘れないでください。

そのためには、中学受験をすることが本当にお子さんのためになっているのかということ、中高一貫校にお子さんを何故通わせたいのかということ、受験前の比較的余裕のある段階で確認しておきましょう。それが中学受験の学校選びにあたっての、「親の基本姿勢」だと思います。

お子さんに合う学校の個性を見つけてほしい



では、学校選び、具体的には中学入後のお子さんの学力、人間力を伸ばしてくれる環境をどうやって選んでいくのかを考えることにしましょう。お子さんが中学受験で目指している中高一貫校(私立だけではなく、国立、公立校も含む)には、その数だけの数百の教育の姿勢があります。その中からお子さんに最適な学校を選ぶのは決して簡単な作業ではないでしょう。

しかし、すべての受験生の保護者はそれをやらなくてはなりません。一人ひとりのお子さんに個性があるように、学校にとつても学力、人間力を伸ばしていく過程がそれぞれ異なります。単一の道のりなどありません。どのような過程があなただけのお子さん

とで、生徒が主体的に取り組む土壌を意識して構築していくことになり。それは、生徒がつねに主体的に考えて行動し、判断することにつながるのです。

point 2 中高での指導にメリハリがあるか。基礎・基本をしっかりと教えているか。

中高一貫教育での指導ではメリハリと言いますか、生徒の成長段階を配慮したものとなっているかどうかに注目すべきです。中学校段階で、基礎となる部分、基本となる事柄をきちんと教えこみ、堅固な土台を構築してこそ、学年が進むにつれて学びが意欲的なものとなるのです。

そこでは必要な知識の習得を怠ってはいけないのです。高等学校段階では基礎・基本の上に、論理的思考力、データ分析能力などを磨き、知識を活用していくことが求められるのです。

日本の大学は、専門教育に特化する傾向が年々強まっています。そのため、大学で教養を学ぼうとするのが難しくなっています。中等教育期に基礎・基本となる土台を固め、基礎的教養を身につけておくことがますます大事になってきているのです。専門的な知識だけが豊富でも、教養の欠如した人物は、グローバルな社会においては高い評価を受けることは残念ながら難しくでしょう。

これからの時代を生き抜く人材となるための基盤づくりを意識した教育実践をしていく学校かどうか問われるのです。

の学力・人間力を思う存分伸ばしてくれるのかを考えるとほならないのです。

かつて、中高一貫校は、大学合格力が公立に比べて圧倒的に強いからとか、将来の大学受験に有利だから入れたいという考え方が主流でした。前年の東大の合格者数の増減と中学受験の出願者数の増減が、中堅上位の進学校では、びたりとあてはまったものです。近年の中学受験を見ていると、受けさせる側も大学合格実績の充実が魅力ではあるもののあくまで魅力の一つと見ているところがあります。つまり、学校観が変化していること、学校評価の物差し微妙な変化が入試状況に影響を与えてきているのです。

グローバル化ということが盛んに言われるようになったことで、従来型の学力の育成では通用しなくなるのではないかと、不安が社会全体に生じてきています。それを受けて、私たち自身の学力観も急激に変化してきています。社会全体が大きく動いている中で、多様性が求められ、その多様性を評価することが評価されてきているのです。旧来型の学力の構築にとどまっている限り、置いていかれるという雰囲気すら生じてきているのです。

それが、21世紀型の学力、及び資質を身につけておかないと、これからの時代を生き抜くことは難しいと言ふ声となつてきているわけ。そして、主体的・能動的な学びへの注目は高まってきているのです。次代が求める学力・資質のベースの部分を引きとつけてもらいたく、それに最適の環境を中高一貫校に期待しているということがあるのかもしれない。それが近年の出願状況につながつてきているのでしよう。

point 3 「自分は何者か」を考える場を提供されているか。自己肯定感、自尊感情を意欲させているか。

中高の6年間には、「自分は果たして何者なのか」ということをじっくりと考える時間、「何をやりたいのか模索する」場が必要です。高校受験に時間を費やさないでいい中高一貫教育にはそれだけのゆとりがあります。自己を見つめることを通して、自分とは何者か、どういうことで社会に、そして国に貢献できるかということを考えていけば、次には、自分は何をしたいのかということに行き着くでしょう。

自己理解が深まれば、自分の中にある部分を必ず見つけることができるでしょう。そうなれば、そこには自己肯定感・自尊感情が芽生えてきますから、何がしかの自信につながるのです。自尊感情が低いとチャレンジしようという意欲も高まりません。自己理解が進むことで、他者への尊重と優しさが生まれ、そして他者理解が増せばコミュニケーションは円滑になり深度も増すでしょう。国際社会では、学力や教養を身につけ、果敢にチャレンジする人は、多くの人々から尊敬を受けます。そのためにも、自分は何者かを考える時間、何をやりたいのかを模索する場がどのような形で提供されているかをチェックしてください。

